

第三詩集

『求道者たちの祭儀』

向 殿 充 浩

目次

ぼくは宇宙の底で・I	1996.11.23
求道者たちの荒野で	1995.9.30(最新改訂:2016.12.25)
ぼくの名前の上に	1989.8.13
危機に瀕して	1990.2.10
天使がぼくの扉を	1985.12.15(最新改訂:2026.11.11)
閉路	1988.2.14(最新改訂:2017.9.8)
求道者たちの祭儀	1985.6.16
ぼくは再び荒野で	1988.5.28(最新改訂:2017.9.13)
夢を見た	1988.1.19(最新改訂:2016.11.3)
死と再生の円環のはざままで	1989.10.30
舞い降りる	1993.2.14
祈り	1993.6.6(最新改訂 2019.2.18)
雨	1993.6.27
カシスで、石や魚たち・I	1983.12.20
カシスで、石や魚たち・II	1995.6.10(最新改訂:2019年7月)
君がひとりぼっちなのか	1994.11.26
無題(透明なけれど冷たい女神のまなざしが)	1991.11.4
十二月の太陽	1992.1.2
今日の夢	1994.3.6
無題(けれど、風が砂ぼこりを舞いあげ)	1994.11.14
虚無の断崖で	1988.10.10
夢を見る	1992.2.23
宇宙的な日に	1995.3.11
天の窓	1990.8.4(最新改訂:2020年)
無題(世界の壁をぼくは見た)	1988.1.17
残光	1991.8.10
ぼくは風を飲み込んだ	1988.4.24
存在の中の振り子	1991.2.16

ネパールのブッダ	1991.2.16
神話の世界へ	1992.12.20
曼陀羅の世界へ	2003.5.19(最新改訂:2019.4.3)
悪魔祓いのために	1988.12.28
万霊節	1998.11.1
ヒンドゥーの夜	1995.2.10
ヒンドゥーの神々に	1995.1.7
神と向かい合って	1996.12.1
ペルシャの呪術師たちに	1994.8.15
神界へ踏み込み	1994.5.25
今日の夢を今日のために紡ぎ	2003.3.22

ぼくは宇宙の底で・I

ヴォルフガング・シュルツェの夢に、
偉大な賢者の夢に、
そして名もない求道者たちの夢に
灯明を灯し、祈りを捧げよう。

ぼくのちっぽけな夢、
あなたの無限な夢、
そして時空を渡る菩薩たちの夢を
砂曼陀羅の中に描き込もう。

宇宙では創造の意味を求めて神々が戦っている。
遊星の上では多様性を求めて真理が分裂を繰り返している。
そして荒野では今日も新しい仏頭が刻まれている。
ぼくは小さな時間の断片をキャンバスの上に刻み込む。

けれど沸騰する音たちの響きはいったい誰が紡ぐのか！
求道者たちの言葉はいったいどこに刻み込まれるのか！
あなたが今日も新しい道を歩み、
神々が創造の炎を再び宇宙の中心に灯したとしても、
一つのるつぼでぐつぐつと煮られた無数の音たちの夢は
いったいどこに結晶するのか！

ぼくはぼくのちっぽけな夢を紡いでいる。
はるか上空では菩薩たちが通り過ぎている。
そしてはるか遠い宇宙では神々の戦いが続いている。
曼陀羅の中心であなたが永遠の踊りをやめる日にも。

1996.11.23

求道者たちの荒野で

神が祈りを捧げ、
あなたが地上に曼陀羅を描き、
それからぼくはその上を裸足で歩いた。

厚い灰色の空に
目をかっと開いた憤怒神の咆哮が響き渡り、
縹渺たる風の荒野に
求道者たちの朗誦が響いた。

あなたは聖なる台座の上で踊り続ける。
ぼくは布切れの上に曼陀羅を描き続ける。
鳥が不吉に舞い、
ジャッカルの遠吠えが聞こえ、
地の底から
顔を歪めた存在者たちの声が押し寄せる。

だから、さあ神よ、新しい戦いを始めよう。
時間を切り取り、
砂を集め、
無限の空虚をるつぼで煮込んで、
新しい祭壇に振りかけよう。

あなたは黙って神を見つめ、
世界を打ち壊す時を待っている。
求道者たちは我を忘れて
音楽に没頭しきっている。

夢が夢を食い荒らす世界、

向殿充浩 第三詩集「青ざめた鳥たち」

一なるものへの

あやふやなまなざしが

奇妙な形をした光に導かれて、

無表情なあなたに突き当たろうとしている。

1995.9.30(最新改訂:2016.12.25)

ぼくの名前の上に

ぼくの名前の上に
もう一つ別の名前が書かれる。

その者の意志によって
ぼくは翻弄される。

存在の薄っぺらな表面。
ぼくはただの粘土板、
ぼくはただのうごめく石にすぎない。

名前を書く者たちが群がる世界、
存在は魑魅魍魎たちの記号にすぎない。
ぼくが、ゆっくりと、
溶け出している。

1989.8.13

危機に瀕して

世界の深淵に錨を降ろした妙なる精霊の声は
忌まわしい日常性の中に瓦解した。
ぼくを導きつづけた荘厳な光は
喪の領域へと後退していった。
血塗られた荒野も
氾濫する川も
ぼくの視界から消え、
豊饒の実りが祭壇の前に並べられ、
赤ら顔の祭師が
得意げに祈祷をあげている。
ぼくは危機に瀕しているのだ。

ぼくには永遠の宇宙を流れる真音の響きが必要だった。
ブッダの声が、
荒野の中の沈黙の仏頭が必要だった。
麦の野をなぎ倒して
一瞬の閃光の上を進む異界の者たちのように、
一切を顧みず、途方もなく無に近づく瞬間を
狂気と錯乱の中で体験することが必要だった。

けれど、星からの使者はうつむいたまま何も言わず、
かつてぼくの回りに飛来して来た天使たちは、
今は遙か遠い虚空の中に去っている。
我と一者との不思議な脈絡を捉えた音楽は
その響きを無機物の中に閉じこめられている。

空気がうっとうしい。
世界に向かって吠えた詩人は
いったいどこをうろついているのか！
陶酔した色の領域に呪術的な絵画を描いた画家は
今はどの時空の中に去ってしまったのか！
けれどぼくは、

ぼくの立っているこの地平に刻み込まれた裂け目から
目をそらすことができない。
錯綜した線の領域に、
狼の吠える川のほとりに、
ぼくの領土がある。
ぼくは獣の骨を削り、豹の油を塗り、
遠い未来の洪水を占い、
魔界の魑魅魍魎たちと
赤茶けた大地の上で踊り狂わずにはいられないのだ。

ぼくは叫び出さずにはいられない。
ぼくはぼくの剣で空をずたずたに切り裂かずにはいられない。
かつて精霊が支配した
多層次元の世界を闊歩すること、
遊星の上にはいつくばらされた
意味不明の象形文字を集めること、
それがぼくの喜びだ。
けれど意識によって縛り付けられた世界からは
離脱しなければならなかった。
ぼくの祭壇に捧げられた生贄の数ははかり知れない。

ぼくは瞑想と真摯な観想によって
世界を突破することを試みた。
けれど、ぼくは危機に瀕している。
絶対者の意志が瓦解し始めている。

1990.2.10

天使がぼくの扉を

天使がぼくの扉をたたいている。
誰かがぼくの名前を呼んでいる。

窓の外で、
凍りついた時間の外で、
忌まわしい虚構の風の向こうで、
トルソのうつむいた眼差しが
ぼくを見つめている、
ぼくに訴えている、
でも何も言おうとしない。

歩き過ぎて行った小さなブツダ、
そして沈黙しきった石たち、
道の上で砕けたままの
夢の軌跡。

そうだ、
この荒れ果てた広大な大地の上で
求道者たちの祭儀の輪が
ぼくの名前に呪いをかけているのだ。
時間の中に打ち込まれた楔が
ぼくの心臓に
突き刺さろうとしているのだ。

でも空の上には途方もない青の広がり、
空虚の中に霧散していった石たちの音楽、
誰かが小さくつぶやくぼくの名前。

1985.12.15(最新改訂:2026.11.11)

閉路

道が閉ざされているの知らないわけではない。
ぼくたちの存在というものが
唯一者の戯れにも等しいものだから
目をそらしているのでもない。

でもぼくは耳を澄ましたいのだ。
重い大気の中にポツンと置き去りにされた声、
世界の絶壁の上で荒れ騒ぐ風の声に
耳を澄ましたいのだ。

誰もがいつも夢を見ているわけではない。
無人の遊星の上の光のかけらが
時間を飛び越えて骨たちを照らしているのでもない。
けれど閃光によって廃墟となった都市の全景が
月明かりの下の残虐な祭壇が
希薄な大気に向かって呻いているのだ。

大地は怒りと哀しみとに満ち、
海は乾燥した宇宙に向かって波を泡立たせている。
小さな一枚のキャンバスに張り付いた
星や記号たちの他には
笑いをたたえているものとてない。

ゼロと一、
それから無限、
漂泊者の魂の焼けつく荒れ野で
神がひとりぼっちで
石を削っている。

(ヴォルスに捧ぐ)

1988.2.14(最新改訂:2017.9.8)

求道者たちの祭儀

この広大な大地の上で、
けれどいったいぼくは何をしているのだろう？
そして風はいったい
どこに向かって吹きすさんでいるのだろう？

遊星の上では
本来的なものへ突き当たることを拒絶された者たちが
形の向こうへ道の向こうへと
砕け続けている。

世界の絶壁のふもとでは無数のトルソが
存在者たちのあえぎの中に沈黙して立ち並んでいる。
どこにもない賢者の光輪の中で
なにものでもない者たちの踊りが
陶酔しきって踊り続けられている。

その生起をけれどいったい
誰が回転させているのか？
空を駆ける巨大な鳥は
けれどいったいどこをめざして飛んでいるのか？

無駄なものの中へ拡散させられた、
幾多の時間を砕くための賢者の思索は
たとえ結実したとて一片の象形文字と化するだけなのだ。
とうの昔に鳴り止んでしまった絶対者の咆哮は
世界でないものの内で反響しているだけなのだ。

虚無の断崖では

未知なる形への儀式を執り行うひとりの祭司が
縹渺たる風の中に宇宙的形象を祭っている。
世界の浜辺では清澄の人の足跡を
天使たちがひっきりなしに踏みしだいている。

どこにもなにもありはしない！
そして本当になにもわかりはしないのだ！
世界の裏側の斜面で
石たちの声が転げ落ちているだけなのだ。

求道者のいなくなったちっぽけな遊星の表面で
存在でも非存在でもない時間の濁流が
ゴーゴーと音を立てている。

1985.6.16

ぼくは再び荒野で

ぼくは祈る。

遊星の表面が

荒々しい閃光の襲撃に晒される日、

宇宙の希薄な空間に向かって

しもべたちの哄笑が響く日、

その絶対の日に、

ぼくは白い衣に着替え、

無人の野の祭壇に香を炊いて、

誰でもない神に向かって祈りを捧げる。

けれどそれはぼくだけではない。

現実をあてどなく繰り返すにすぎない世界で、

不可解な敵意に満ちた世界で、

求道者たちは今日も呪術的な言葉を並べ、

常軌を逸する危険を冒して、

地平線の碎破を試みている。

この遊星の上には

曖昧なものへの偏愛と

目に見えないものへのかたくなな拒絶とが

素焼き煉瓦のようにはてもなく積み上げられている。

狂気の画家は錯綜した線で空間を埋め尽くしたし、

口ごもった詩人は悪魔払いの儀式を行った。

けれど、ぼくたちの反抗は

ついえ去ってはいない。

青ざめた戦時下でも

幻想に包まれた繁栄の時代でも

途方もない裂け目を凝視するまなざしは
いつも灰色のトルソを
孤独な鳥を
清々たる星座の動きを
見つめ続けている。
忌まわしきはただ、
この遊星の上にへばりついているものだけなのだ。

ぼくは再び荒野に戻ってきた。
そして白い衣に着替え、
無人の野の祭壇に香を炊いて
祈りを捧げる。
何ものでもないものたちに、
還元された夢の形に、
創造と混沌の道に、
そして、根拠のない様々な紋様の向こうにある
ちっぽけなひとつの石に。

1988.5.28(最新改訂:2017.9.13)

夢を見た

遊星の上の絶壁のほとりで
ぼくは再び神と対決した。
光の粒が蒸気に照り映える朝、
雲が渦巻く淵の上に
ぼくらは浮かんで対決した。

かつては神の勝ちだった。
長い対峙の末にぼくは急速に年老い、
気力が萎えて、眠り、沈み込んでいった。
その後の恐るべき沈黙の時間.....

けれどあれから数千年が過ぎた。
遊星の上では新たな変化が生じていた。
幾多の戦いが繰り返され、
意味を失った瓦礫が川を埋め、
被造物はしだいに色あせ、
音の波は高遠な思惟を失っていた。
光は明るかったが、
振動は弱まりつつあった。

一方ぼくは目覚め、
活力に溢れ、
新しい文字を創造し、
未知の領土を切り開くことができた。
絶壁の上に色彩の車輪を回転させ、
虚空を青く染める術を身につけていた。
意志をトキの中に溶かし込み、
異次元の発光を結びつけることができた。

長い沈黙にもぼくの心は萎まなかった。

.....

.....

.....

今度はぼくの勝ちだ！

神がゆっくり頷き、

眠りもよいかもしれぬとつぶやいた。

そして目を閉じ、

ゆっくり雲の下へ沈んでいった。

朗々と水の音が世界に響く光の朝、

ぼくはひとりで音の上に浮かび続けた。

.....

...

..

1988.1.19(最新改訂:2016.11.3)

死と再生の円環のはざままで

死と再生の円環のはざままで、
ぼくはひとつの脅威にさらされていた。
巨大なパラドックスが夢をなくした者たちの上を闊歩し、
活性化された狂気が純白のキャンバスを汚していた。

だから、娘たちよ、
預言者は偽神によって預言を行い、
汝らは欲情に駆られて裸足になるだろう。
罪なき者たちの血が恥辱の中に伏し、
青白い顔をした神々が死の王座に座るだろう。
創造と混沌の胎動が
世界の周期的な帰滅と再建をグワッシュの上に描き出し、
閉ざされた神話が
未分化のエネルギーを解体するだろう。

貫通者の娘よ、
頭に灰を撒き、
湖のほとりで死の天使の羽ばたきを聞くがいい。
暗黒の地に住むラクシャーサは
人間の肉を食っているし、
アプラサもヤクシャも死を肩にぶら下げている。

けれど、受戒者に授けられる創造力は
狂気原野に奔放な光を放っている。
ある者たちは
狂気ほど崇高なものはないと言うだろう。
またある者たちは
近親相姦のベッドの上に真理があると言うだろう。

神は我々を破滅に導きさえするし、
暴力的な色彩空間を演出しもあるだろう。
自己の内部にある形姿に真理を求めるパラノイアよ、
現実の内臓を白日の下にさらすがいい。
魂の中に棲息する「魔」は
倒錯的なナルシズムの中に溶解している。
白檀の香りを処女の陰毛の上にふりかけ、
自分がなくなってしまうような静けさの中で、
銅鐸を鳴らし、
石をたたくのだ。
反復不能なフォルムを境界の見えない宇宙に刻み込み、
ハイエナの吠る荒野で、
ひとり燔祭を執り行うのだ。
偉大なるパラドックスよ。
女より生まれでた者よ。
膺の温もりを荒野の祭壇に捧げ、
輪廻によって引き裂かれた日常性の皮膜を
始源的なレヴェルへと還元するがいい。

笛の音が近づいた。
ぼくは死と再生の円環のはざまに座っている。

1989.10.30

舞い降りる

空から舞い降りるぼくたちの目に
森の中の方形の基壇が見えてくる。
その中央には小さな円いストウーパが
三層の輪をなして並んでいる。

仲間たちが頂上の露壇に次々に降り立ち、
基壇を右回りに回りながら、
再生の輪廻から解放された
瞑想するブッダたちに祈りを捧げる。

未来のブッダである彌勒菩薩を幻の中に見、
遠い時空の彼方からぼくたちは旅を続けた。
一つの道を
何千もの道を、
そして一つの宇宙を
何千もの宇宙を
歩き続け、夢に見続けた。

祭壇の上の空には満天の星、
そして、森の向こうでは獣たちの声。
存在の中心の乳海では
神がまどろみの中に横たわっている。
清々とした無限の時間が
無人の遺跡の上で
微かな光を放っていた。

(ボロブドゥールにて)

1993.2.14

祈り

舞い降りてくる風をぼくは捉えた。
数限りない夢の粒が
夜の空の無数の星たちの中に砕けるのを
ぼくはボサツたちとともに見送った。

地上の黄ばんだ紙の上では
無数の美しい演戯記号が色褪せ、
壁画の上には今日を刻印する文字の列が
漕ぎしなく続いている。
そして、巷では、
神をなきものにする途方もない企てが凱歌を上げ、
昔ながらの男たちや女たちの喧噪が
路地のいたるところで沸き返っている。

けれど、月明かりの下で、
かつて一人のピエロが
悲しげな声で向かい合った月明かりの下で、
世界は微かに震えているのだ。
形なき者たちの慟哭が
夜空に向かってあてどもなく散逸しているのだ。

だから、ぼくはもう一度、
記号たちを拾い集める。
もう一度、世界を形作るための儀式を執り行い、
石たちの声を
この巨大な虚無に向かって響かせてみるのだ。

核と為替レートと支持率が支配する世界、

憎しみと妬みと欲望の交錯する世界。
ぼくはゆっくりと星々の輝く空を見上げた。
途方もなく広がる満天の空を見上げた。
神々の哄笑がこだまし、
一なるものへのはるけさが心の原点に突き当たる瞬間を
そっと心に中にすくい上げた。

ぼくにできることは、
もう一度、小さな祈りをつぶやくことだけ。
でも、求道者たちの祭儀の音が、
何ものでもないものたちの中に響くかもしれないのだ。

1993.6.6(最新改訂 2019.2.18)

雨

ぼくが塗り込めたキャンバスの上に
柔らかい追憶の雨が降り注ぐ。
岸のほとりの干からびた夢が
生ぬるい風に触発されて膨れ上がり、
静寂の池のほとりでは
とんぼたちが交尾を繰り返している。

きのうのぼくは切り裂かれた世界を
もう一度つなぎ合わせてみたかった。
だからぼくは土を掘り、
捜し当てた夢の破片を
キャンバスの上に貼り付けた。
たった一人のあてどもない祭儀の煙を
荒野のただ中に立ち昇らせた。

宇宙の中心に横たわるアナンタの上の
一瞬のまどろみ、
数十億光年を瞬きによって突破する
神々の試み、
美しいものと醜いものの区別のない世界で
歪められた形象に向かい合い
緩やかに下り坂となる時間の断点を
必死に突破しようともがく無数の虫たちのざわめき。

雨、雨、雨、
無数の夢を飲み込む
冷たいこの静謐がいい。
菩薩たちは今日もまた
空虚の中を歩き過ぎている。

1993.6.27

カシスで、石や魚たち・I

青い色の空間で
さまざまな植物が記号となる。
ぼくたちを包み込む透明な球体、
そして沈黙の目、
無言でじっとしている石たちの
存在の向こうでのつぶやきが
ぼくたちに時間の断点を教えてくれる。

記号と化した石や魚たち、
重みを持たない図形と四方に残る深い爪痕、
無邪気に、自由に、
ただ存在すること以上の行為を拒絶する
柔順な存在者たち。

言葉の閉ざされた空間の隙間で
さまざまな物体が形になろうとうごめいている。
遊星の表面の小さな岸边には
カシスの夢が落下している。
存在があらゆる石から
ひとりでに浮かび上がってこようとする瞬間に。

(ヴォルスに捧ぐ)

1983.12.20

[付記]

20 世紀のアンフォルメル画家ヴォルス(WOLS, 1913-1951 / 本名; Alfred Otto Wolfgang Schulze)が残した「カシスで、石や魚たち、ルーペで覗いた貝殻・・・」で始まる詩(言葉)の最初の部分を題名に採用しています。

カシスで、石や魚たち・II

風が消え、
魔法の文字に彩られた道が消え、
昨日の雨の中での夢が
静かな池の波紋に消えた。

白いキャンバスの上の
その小さな領土の上の
奔放な跳躍の中に
無数の瞑想が消えた。

神の領域に踏み込み、
果てしない韻律を繰り返す呪術師たち。
荒々しい神々の足音を耳にし、
絶望の淵で燐光を放つ透明な魚たち。
そして、宇宙と時間の魔法を
もう一度この小さな土の上に再現するぼくの試み。

けれど、宇宙の円環に沿って張り巡らされた吉兆を
もう一度キャンバスの上に描くのは誰なのか？
未知なるものへの密やかな夢を
もう一度無意識の原野へと解き放つのは誰なのか？

石を刻み込む試み、
石を積み重ねる試み、
たった一つの夢を石の上で砕く試み。

(ヴォルスに捧ぐ)

(改訂:2019年7月)

[付記]

20世紀のアンフォルメル画家ヴォルス(WOLS, 1913-1951 / 本名; Alfred Otto Wolfgang Schulze)が残した「カシスで、石や魚たち、ルーペで覗いた貝殻・・・」で始まる詩(言葉)の最初の部分を題名に採用しています。

君がひとりぼっちなのか

君がひとりぼっちなのか、
それともぼくがひとりぼっちなのか、
瓦礫に埋もれた土器の破片たちは
何一つ答えてはくれない。
それでも荒れ果てた廃墟の寺院では
久遠の微笑が時間の壁面に張り付いている。

一瞬のきらめきが生んだ賢者たちの叡智を
君はもう一度、
時間の中に引き戻すだろう。
ぼくはもう一度、
荒野のただ中で
燔祭の煙をあげるだろう。

ぼくは土を掘り返す。
そして遠い昔に消えた音たちを
もう一度掘り起こす。
ぼくはひとりぼっち、
でも、音たちはみずみずしさを
失ってはいないのだ。

1994.11.26

無題

透明なけれど冷たい女神のまなざしが
音もなく軌跡を描いて
宇宙の涯での小さな池に沈み込んだ。

その池のほとりの
時間が踏みしだかれた石畳の上で
屈曲する光たちが列をなした。

荒れはてた墳墓の上では
音を失った銅鐸が呻く。
雪に覆われた湖の上では
月明かりに向かって雪煙が舞う。

一と無限。
その向こう側の茫漠たる空虚。
断崖の上で巨大な夜が
ぼくの名前を削っている。

1991.11.4

十二月の太陽

滅び去ったマヤの遺跡、
緑の野に生ぬるい風が吹きわたり、
十二月の太陽がジャングルの上に輝いていた。
空には黒い鳥が飛び交い、
涯しない沈黙が広野に横たわっていた。

かつてこの地を支配した奇怪な顔をした神々、
十二億六千万カトウンの時を
星々の運行と共に維持し続けて来た巨大な暦、
祭壇の上ではチャックモールが
もはや生贄の捧げられない巨大な時間を見やっていた。

遺跡に照りつける十二月の太陽、
延々と続く緑のジャングル、
そのただ中の真っ白な時間の中に取り残された
神々の祭壇、天文台、そして、
風の中に掻き消えた祈りの声、

けれど、神殿の頂では、
投げかけられた者たちの道がゆっくり砕けた。
一切が四十三億二千万年の時の渦に飲み込まれ、
遊星の上でのたあいない戯れが
宇宙の根源たるビッグバンからの波動の上で
さざ波のように揺れていた。

神々の虚ろな手が
振り上げられたまま止まっている。
そのとき、西のジャングルに
大きな夕日が沈もうとしていた。

(マヤの遺跡にて)

1992.1.2

今日の夢

熱病のような情念となまめかしい官能が
止むことなく遊星の上で荒れ狂う世界。
その世界で
一つの時間が神の杖に突き当たって、
野には巨大な神殿とレリーフが残った。

ぼくが欲したものは夢のような絵画と
手折ることもできない微妙な感情。
死者に手向ける勤行の声に合わせて
足元の小さな石を蹴り、
白い壁面に向かって
ありったけの絵の具を投げ付ける。
川を下れば
年老いた船頭の陽気な笑顔に突き当たり、
その向こうには沈黙した山が
雪を抱いて残光に輝いている。

真実と事実。
そして、
空虚の中心で形になろうとする
未知なる者たちの声を、
いくたびもいくたびも
練り合わせ、釜度で焼いてきた
無数の手。

宇宙の中心にまどろむ神が
蓮華の花環の中で新しい夢を見、
空へと通じる一切の道が

巨大な時間の中に溶け去ってゆく日、
花粉の舞う宇宙の窓辺で
星たちの巡る軌跡の上の
金属的な音たちの列に
そっと耳を傾ける。

ぼくと青ざめた神は
今日の夢を新しいキャンバスに描き付ける試みを
いくどもなく繰り返す。
一瞬から永遠への転化を
ここから彼岸への踏破を
光の中に噛み込もうと試みる
何ものでもないものたちのざわめきを聞きながら。

1994.3.6

無題

けれど、風が砂ぼこりを舞いあげ、
月が悪意を含んで煌々と輝いていた。
夜の雲の下で沈黙を守っている
太古の昔から聳える黒い山、
そのふもとで鍵盤に向かい、
求道者たちの祭儀の歌を歌い続けるひとりの賢者。

でも、ぼくは問い続け、
形のないものへ
形をなそうとしないものへ
祈りを捧げる。
青ざめた神は、
宇宙の涯てから地球を眺め、
ぼくは未知なるものへの夢を
ただひたすらにタブローに焼き付ける。
虚空の中のただの一点に流れ込む
無音の領域を捜し求めて。

1994.11.14

虚無の断崖で

風の中の反乱。

風の中の

荒れ騒ぐ風の中の

砂たちの反乱。

兵士たちの

流浪の民族たちの

人間によって破壊された仏たちの

砕け落ちた記憶の切片への

途方もない反乱。

けれど、太古の石は

不思議な笑いを浮かべ、

広大な地平は

宇宙のちっぽけな法則をあざ笑っている。

薄っぺらな紙片の上では

賢者たちの言葉が

言われなき誹謗によって汚され、

断崖のふもとでは

無数のトルソが

存在者たちの喘ぎの中に立ち続けている。

金色の鳥は孤独に闇の中を徘徊し、

裸の天使は流砂の中でうち震えるだろう。

閉ざされた魔法陣がぼくの中心で渦を巻き、

空の青の中では

誰でもない者たちによって

絶えまなく弔鐘が打ち鳴らされる。

ぼくの内側で展開を待っている無限図形への憧れ、

どうの昔に鳴り止んでしまった絶対者の咆哮、
虚無の祭壇の上では風化したブツダが
のっぺらぼうの時間に貼り付いている。
世界の浜辺では清澄の人の足跡を
天使たちがひっきりなしに踏みしだいている。

千年が、そしてまた千年が、
淡々と羅刹たちに食い荒らされてゆくだけの遊星。
けれど、
声は荒れ騒いでいるのだ！
存在でも非存在でもない
巨大な時間の濁流が
ガンガーの中で渦を巻いているのだ！

遊星の上から、時間の斜面から、
石たちが転がり落ちている。
どこにもない賢者たちの光輪の中で、
何ものでもないものたちの踊りが
丸い大地の上で、
陶酔しきって踊り続けられている。
世界と世界でないものを隔てる絶壁の山のふもとでは
未知なるものへの儀式を執り行う一人の祭司が
縹渺たる風の中に宇宙的形象を祭っている。
そして存在の表面に付着した者たち、
時間の斜面で喘いでいる者たちが、
泥を練って石たちの声を紡ぎ出しているのだ。

でもぼくは
求道者たちのいなくなったちっぽけな遊星の表面で、
空っぽの宇宙の中で、

砕けた声たちを飲み込んでゆく無明の大海の中で、
幻界の中の試みを刻印し続けるだろう。
そして、平らな時間の上に清澄の響きを打ち込み続けるだろう。
天使たちの無垢の笑いのために、
吹き払われた無名の声たちのために。

きっと道の上では「ぼく」が
石と化している。
あなたがそれを望んでいるのだ。

1988.10.10

夢を見る

試験管の並んだ実験室、
冷たいきらめきを放つガラス器具、
がやがやと声のする打ち合わせ室、
分厚い本の並んだ陰気な図書室、
そのはるか頭上で
勤行の音が流れて行った。

そしてぼくは夢を見、
広大なすすき野に立って、
重い雲が低く垂れ込め、
風が唸り、巨大な空気の波が押し寄せ、
存在する者たちがみな体を震わせるのを見つめた。
世界のいたるところで、
小さな路地で、
巨大なビルディングの中で、
球技場で、劇場で、
雪煙の舞う雪山で、
今日も人間たちの小さな跳躍が見えた。
喜びの笑いと金切り声が交錯し、
無思慮な放縦と涙に濡れた悲嘆が
大地を燎原の火のごとく駆けて行った。
そのはるか頭上で
勤行の音が流れて行った。

そして神は夢を見、
無限を凝集した乳海に身を浮かべ、
人間の一生が瞬きひとつであるような時間の中に
己のまどろみを溶かし込んでいった。

ちっぽけな石たちの
宇宙という小さなフラスコの中での
永遠の旅。
けれど、ぼくは神と向かい合い、
時間を刻みこむ戯れに対する
無言の哄笑に耳を傾け、
永遠に止むことのない一なる者からの波動を
八六億四千万年ごとの巨大な回帰に中に感じとる。

一なるもの、
虚無、
……
そして無限、
時間の中に立ち現れるブッダを
神が透徹した微笑で見つめている。

1992.2.23

宇宙的な日に

恐ろしいまでに銀河的な世界、
蜃気楼の中で描かれた一枚のタブロー、
その常軌を逸した超世界で
預言者たちが繰り返し弔鐘を打ち鳴らしている。

狂気であり、崇高である
無意識が光であるような世界、
その世界の深淵に錨を降ろし
他界のかなたへと自己を溶解する
唯一者であり、破壊者であるひとりの神、
その神から溶け出てくる音の波紋を
あなたは孤独な行者のようにすりつぶす。

有限地平からの踏破を夢み、
宇宙の帰滅に参加した
時の征服者たるカーリーよ、
静止した瞬間を積み重ねた音楽を
葬送の原野で刈り取る
翼を失った霊鳥たちよ、
夢が食い荒らされるこの宇宙的な日に、
無量の光明を停止させる魔法陣を
嘲笑の渦巻くこの領土の上に、
赤い血とともに焼き付けるがいい。

閉ざされていた神話が天界から降り注ぐ日、
あなたは石によって預言し、
ぼくは銅鐸を打ち鳴らして鬼神たちと踊るだろう。
第三の目をもった神が欲望を解き放ち、
すべてが大地を駆け巡るカルキの足元に融没する
この宇宙的な日に。

1995.3.11

天の窓

瞑想の限りない空の底に並んでいる
ぼくの彩られた石たち。
言葉の絶えた鉄条網の向こうで草たちを靡かせている
あなたの軽やかな風。

夢の中の鳥たちは
世捨て人の庵の上にたたずみ、
月や星は
記号のようにゆっくりと天を巡っている。

ぼくは毎日シュメールの占星術を学ぶ。
新聞には新しい戦争の話が載っている。
廃墟の街で見かけた
無垢の笑いの結晶化した一枚の壁画。
さんさんと輝く日の光の下で、
幾重にも積み重なった石たちの声、声、声。

1990.8.4(最新改訂:2020年)

無題

世界の壁をぼくは見た。
白い壁に描かれた文字をぼくは読んだ。
神々の死に絶えた時代の
光り輝く文字だけが朗らかだ。

1988.1.17

残光

ブルックリンからグリニッジヴィレッジへ
タイムズスクウェアからブロンクスへ
一服のヤクを求めてさまよい歩く
ぼくの時代の最良の精神たちよ、
アメリカの詩人は狂気の沸騰する時代のただ中でそう書いた。
そして、人間たちへの深い悲しみのまなざしを投げて
ガンガーのほとりの死体焼き場へとおもむいた。
ホモセクシャルとヤクの衝撃的な痙攣と
吠えずにはいられない神聖な精神の爆発、
ぼくはその詩をひとり静かに
日本の古都の小さな喫茶店で読み、
いつか人間たちのいなくなった遊星の上の
雪の降り積もったエンパイアステートビルに
天使たちが降り立って
冬の日朗々たる光を浴びるだろうと
破れたノートの切れ端に書き付けた。

深い霧が意識を厚く覆った長い道の途上で、
ほんの一瞬存在が透明になった時間だった。
無意識の闇の上にある人間の意識のような
無限の海のはてない眠りの中で、
ぼくは突然、
存在の核心に突き当たるための
何者かの一撃を感じとることができた。

そうだ、
かつてアル中の画家は
ペンキをキャンバスに放り投げた。

そして錯綜する色と線で
混沌とした宇宙の底に潜む
深く敬虔な響きを描き出した。
インドで修行した音楽家は音によるマンダラを描いた。
そして単調なフレーズの繰り返しのよって
存在が時間と空間から自由になる瞬間を
無限の中へ溶出させていった。
一方、学者たちは緻密な計算を繰り返し、
存在の核心に迫ろうと試みた。
そして数億年前にうごめいていた生き物たちを
意識の中に復活させてみせた。
四十六億年の地球の歴史をひもとき、
たった一度のビックバンを描いてみせた。
小さな花粉の中の生命の輝きにも
巨大な宇宙の冷徹な法則が脈打ち、
その重々しい時の流れが
小さな蟻たちの体の中にも凝集していることを証明してみせた。

百数十億年前のたった一度のビックバン、
けれどウパニシャドの作者たちは
四十三億二千万年がブラフマーのただ一夜であり、
ブラフマーの一生は百八ブラフマー年続くという
巨大な宇宙を知っていた。
インドラにインドラが続き、
ブラフマーにブラフマーが続く。
たとえ大地の砂粒の数、
空から降る雨粒の数を数える者がいたとしても
次々と並んでゆくインドラの数、
空間の広大な無限性をかいくぐって
それぞれのインドラ、

それぞれのブラフマー、
それぞれのシヴァをいだいて
ずらりと並んでいる宇宙の数を
いったい誰が数えることができようか、
といわれる宇宙の渦。
その宇宙の臍にヴィシュヌが座り、
永劫のまどろみの中に横たわっている。
やむことなく繰り返される創造と破壊、
その破壊を愉悦に満ちた、
けれど冷淡な表情で踊る
宇宙の破壊者たるシヴァ、
その表情には
宇宙の法則に従って淡々と己のなすことをまっとうし、
それを己の喜びとしてゆく神の心が溢れ出している。

その踊りはきれいな美術館の一室の
小さなガラスケースの中に収められていた。
ぼくは静かな美術館をゆっくりと歩き、
人間たちの狂気と沸騰する野望とが生み出した
途方もないものどもの残骸を見て回った。
そして人ごみをかきわけてエンパイアステートビルに上り、
青空の下に広がる煌々としたビルディングの群れや
夜の美しい夜景に目を見張った。

けれどビルから見渡せる煌々たるネオンの下では
今日も生き物たちの喘ぎと呻きが続いているのだ。
カディッシュの祈りを歌った詩人も年をとった。
ペンキをキャンバスに放り投げたアル中の画家は
電柱にぶつかってあの世へ行った。
存在の苦悩を謳ったユダヤの詩人はセーヌ川に身を投げた。

カシスで石や魚たちと書いた画家は
馬肉にあたって一生を終えた。
存在を探求する者たちへの
情け容赦ない仕打ちが
依然として遊星の上を荒れ狂っている。

かつてブッダは菩提樹の下に七日間結跏趺坐し、
縁起の神秘を測り終え、
一切の個別化された存在の束縛についての
新たな理解を廻らせたものだった。
生きとし生けるものすべてを束縛する
生れついでに宿命的な力を
輪廻の輪から離脱させたものだった。
けれど、
金色の鳥が舞う荒野で仏頭を刻んだ仏師たちは舞台を降り、
瞑想のブッダはパキスタンの野のただ中に立ちすくんでいる。

ぼくはアメリカの静かな公園の
小さな池のほとりで立ち止まった。
その池に住むみずすましたちは
千年前この池にいたみずすましたちの
末裔かもしれなかった。
十万年前には
この池のほとりで
一匹のかもしかが水を飲んだかもしれなかった。
けれど一千万年前にはこの池はなかった。
ここは海の底だった。
一億年前、十億年前、ここには何があったのだろう。
そして百億年前、地球はまだなかった。
いや、“ここ”なんてことはありえない。

いかなる場所もこの巨大な宇宙の中で
ものすごいスピードで動いているのだ。
何十億もの恒星からなる銀河系宇宙、
その銀河系を含む二十の銀河群、
その銀河群が構成する超銀河集団。
ゴーゴーと粒子と粒子の運動を続ける
冷たい宇宙。
けれど運動の火炎が絶えず飛び交い続ける熱した宇宙、
百数十億年前のたった一度のビックバン。
けれどヴィシュヌはその創造と破壊を
数えることもなく繰り返しているのだ。
微妙で地上のものでない
官能的な魅惑と
夢のように優雅な妖艶さ。
悟りの体験への内的な没頭と
穏やかな離欲の精神。

ぼくはたった一人で歩いた。
無言のビルディングの哄笑のはるか上空で
何ものでもないものたちの残光が輝いていた。

1991.8.10

[付記]

この作品の冒頭部分などで、アメリカの詩人アレン・ギンズバーグの代表作『吠える』(Howl)の詩句を用いています。

ぼくは風を飲み込んだ

ぼくは風を飲み込んだ。
ぼくは声を飲み込んだ。
ぼくは途方もなく碎破を繰り返す
小さな虫たちの時間を飲み込んだ。

それから世界の壁をぼくは見た。
白い壁に描かれた文字をぼくは読んだ。
神々の死に絶えた時代の
光り輝く文字だけが朗らかだった。

たとえカシスの夢が朽ち果てても
大理石でできた透明な魚は
絶望の淵で燐光を放つだろう。
天使たちに忘れ去られた鳥は
無限円の空間で踊り続けるだろう。

でもまだ言い知れぬ何か
無気味に横たわっている。
存在の根源にまつわる謎が
べったりとぼくの心にへばり付いているのだ。

だから、ぼくは石を打ち鳴らし、
風を飲み込み続けるだろう。
だから、ぼくはぼくの夢をすりつぶし、
道の上で虫たちとともに空を仰ぎ続けるだろう。

世界の謎が解き明かされる日が来ないとしても。

1988.4.24

存在の中の振り子

存在の中の振り子、
あなたのまなざしの下の石の破片、

夜と昼とを分かたない
光の点在する宇宙で、
ぼくの錆びついた意志が
小さく痙攣している。

けれど、新鮮に、
生まれ出たばかりの稚魚のように新鮮に。

1991.2.16

ネパールのブッダ

どこにもない道の上で、
賢者たちの光輪が
乾いた風の中を舞っていた。

どこにでもある空白の時間の上で、
石たちのつぶやきが
宏大な無言の宇宙に揮発していた。

ぼくの存在の中に迷い込んでしまった
無限と刹那。

無から放射された青い光が
小さな水溜まりに
照り映えている。

1991.2.16

神話の世界へ

天空から降り注ぐ星の一粒一粒を
ぼくは拾い集めた。
遠い宇宙からのたった一人の使者が
ぼくの前に降り立った。

けれど、荒涼たる遊星の上には
狼たちの道が続いているだけ、
漠々と広がる丸い大地の上には
一本のバオバブの木が立っているだけ、
そして夕暮れの残光に
乾いた土が真っ赤に燃えているだけだ。

石を削り、土を捏ねたぼくの仲間たち、
夢の曼陀羅の中に、封印の文字を描いた道士たち、
静謐の音を響かせて、玉砂利を踏みしだいた菩薩たち、
そして、海鳴りの向こうで
世界の終わりを踊った魑魅魍魎たち。

焼けただれた砲身に接吻し、
女たちが恍惚の中に衣服を脱いだ時代があった。
神は夢を見ている。
けれど、ぼくも夢を見ている。

1992.12.20

曼陀羅の世界へ

茫漠たる無人の野に香を炊き、
光に包まれた神聖な岩に向かって祈りを捧げ、
それからぼくは
唯一者のいなくなった寺院の扉をたたいた。

朽ち果てた祈りが時間の上に、
そして砂の上に散逸し、
青ざめた神が
土くれだった祭壇の上で干からびていた。

その夜ぼくは広野のただ中で
ひゅうひゅうという風を浴び、
満天の星空の底に広がる喪の領域に導かれて、
ひとり曼陀羅の世界に降り立った。

突然、猛々しい神々の世界からの風が吹き込み、
結晶化していない宇宙の鼓動が
錯綜した光とともに天界から降り注いだ。
陶酔した鬼神たちの踊りが
荒々しくぼくの夢を踏みしだき、
菩薩たちの勤行の列が無表情に通り過ぎた。

傷つけられた無垢なるものたちに思いを馳せ、
息絶えた夢の数々を曼陀羅の中に描き込むぼくの試み。
神と羅刹たちが踊り狂う宇宙の中心で
永劫の業火を喜悦に満ちた心で眺めるあなたの試み。
そして決して描かれることのなかった者たちに呼びかける
何ものでもないものたちの無数の試み。

神の領域を越えて、
オームの声のこだまする殺伐とした広野の祭壇を越えて、
ぼくの上に刻み込まれるひとつの言葉。

縹渺たる丘の上では風が吹きすさんでいる。
夜空の上ではかすかな光が宇宙の輪環を貫いている。
曼陀羅の世界の底で、
切り刻まれた今日という時間の上で。

2003.5.19(最新改訂:2019.4.3)

悪魔祓いのために

存在の表面の
きれいに結晶化した小さな時間を
天使たちがゆっくりと踏みしだいている。
青い晴れた空の下の
走りゆく車と爽やかな街路樹、
恋人たちのほほ笑みと心地よい街のざわめき。
その街角の小さな喫茶店で
ぼくは孤独な行者のように
狂気によって破壊された世界の破片を組み合わせ、
黄ばんだ古い紙に描かれた
戦慄を伴った賢者たちの言葉を
拾い集める。

けれど水晶のように冷たい時間の上では
インドラの矢が重々しい雲の中に霧散し、
大地の上では処女の陰毛への欲情が
衝動的な痙攣を続けている。
そうだ、
虚構の額縁にはめこまれた倒錯的なナルシシズムが
色彩の氾濫する山の宮殿で吠え、
ツァラトウストラの咆哮が
形作られた存在の優美さを次々に打ち砕き、
カディッシュの忌まわしい祈りが
青ざめたカリグラフィーの奥底に潜む剥き出しのザインを
近親相姦のベッドの上に
暴き出しているのだ。

そして、土くれに等しい者たちの

止むことのない呪いの声が
遊星の上に撒き散らされ、
奇怪な顔をして踊り狂う預言者たちが
死骸を焼いた灰を
体に塗りたくっているのだ。
悪魔祓いの儀式によって剥き出しにされた傷口からは
狂った表情の亡者たちの笑いが
朦朧と立ちのぼっている。

そうだ！
神とはいったい誰であったか？
かつてモーセをして荒野に民を導き出させた神は
なんと多くの人々の上に
怒りの灰を振り撒いたことだろう。
神々を支配した青ざめたアヌは
なんと多くの地を
邪悪な酒で満たしたことだろう。
脅えきった生き物たちの呻きは
花の捧げられたリングの回りに結晶し、
存在の表面に固化された者たちが
迷路の中をぐるぐるとあてもなくさまよっている。

ぼくは石たちを一つまた一つと掘り起した。
すると、無気味な哄笑が
原初の音の記憶の中から立ちのぼった。
ぼくはそれを少女の堅い蕾を求める
残虐な世界の維持者たる者の祭壇に投げつけ、
なにものでもない者たちに向かって
形にならない祈りを捧げる。
シッダルタよ！

新しい超韻律への試みは
世界の薄っぺらな表面を突き抜けずにはいないだろう。
そして舞い戻って来た
巨大な忌まわしい神々との対決が
再び混沌の現象世界の内で繰り広げられずにはいないだろう。

ぼくはちっぽけなぼくの図形を
大地の上に投げ捨てた。
ぼくは傷ついたぼくのつぶやきを
電磁波の荒れた波動の中に投げ入れた。
するとそれらはまたたくまに風の中に飲み込まれた。
これまで無であった世界の音たちが
錯綜した夢をなめ回している。

1988.12.28

万霊節

形となることのなかった無数の試み、
消えゆく旋律の上を駆けるぼくの想念、
孤独者の魂が焼けつく荒野で、
繰り返し、繰り返し、沸き上がってくる
無数の韻律。

その荒野で、誰もいない荒野で
満天の星を見上げるなにもものでもない者たち、
この巨大な宇宙の底でうごめく
唯一者から切り離された者たち、
もはやどこにも己を投げかけることのできない者たち。

だからぼくは破れた衣服を引きずり、
孤独な行者のように、
ひからびた祭壇で祈りを捧げる。
心の中に吹く空虚な風を押し殺して、
荒野に舞う金色の鳥を捜し求めて。

あざ笑っている無気味な深淵を前にして
ひとりぼっちで対座する神にぼくは語りかける。
するとこれまで無であった世界がかすかに震え、
マンダラの上を鬼神たちが闊歩し、
はるか上方では聖なる神が破壊の踊りを踊り始める。
風がひゅうひゅうと吹き抜け、
数十億光年の宇宙が覆いかぶさり、
山も石も沈黙を強いられる。

ぼくの中で光る太古の時間、

混沌とした宇宙の中で形とならないものたちが光り、
宇宙の風がぼくの荒れ騒ぐ相念の割れ目から
即興となって噴き出してくるのだ。

預言者の声の渦巻く荒野に新しい風が起こり、
虫たちがうごめく世界の上で
時間との巨大な戦いが繰り広げられているのだ。

けれど遊星から転がり落ちる無数の石たちは
年老いた神の手の中に砕け落ちる。
夢が食い荒らされる世界、
風の音が濁流に飲み込まれる世界、
ぼくの中で砕けるこれまで無であった世界。

1998.11.1

ヒンドゥーの夜

別の大陸で

別の神々が栄えている。

けれど、のっぺらぼうの表面。

歴史は重いけれど、

生き物たちの営みはそっけない。

干からびた夜の空気に

木々の緑だけがみずみずしい一瞬。

1995.2.10

ヒンドゥーの神々に

美しい足音を響かせて
神々が列をなして進む。
舞台の上では
今日もシヴァ神が創造と破壊とを踊っている。

けれどこの世界は、
四三億二千万年のマハーユガの終わりに一切が融没し、
絶対者へと帰滅する世界。
そして、その後と同じ長さのブラフマーの夜が続く世界。
そのブラフマーの百年の後に、ブラフマーの一生が終わり、
乳海に微睡むヴィシュヌの夢見る蓮華の花に、
次のブラフマーが現れる世界。

その世界で、
神々ですら、ただその役割を演じ、
数々の定めと呪いにまとりつかれている世界で、
宇宙の暗闇にぼっかり浮かぶ遊星の上では
ゲームに酔った生き物たちの騒ぎが
熱く熟した時間の上に渦を巻いている。

神々が美しい足音を響かせて
列をなして進む。
神々が列をなして、
荘厳な寺院の中に吸い込まれてゆく。
ダルマに従うことを嘉する神々だけのわがが
風化した石と古文書に刻み込まれている。

ヤージニャヴァルキヤよ、

聖典の言葉をもって、
宇宙の暗闇にぼっかりと浮かぶ小さな星の上に、
神々の夢見るような無関心さを
もう一度投影してみるがいい。
時間のただ中の今日という一点を
白日の下にさらすために。
そして、空虚を嘉する神々たちの声を
大気の中に融没させるために。

1995.1.7

神と向かい合って

時間の裂け目に振り下ろされた神の一撃が
ぼくをおののかせた。
永遠を貫視する神のまなざしが
ぼくをいらだたせた。

けれど、神の領域に踏み込むのに、
どんなためらいが必要というのか。
形なきものへと還元され続ける宇宙の底の存在者たちにとって
護らねばならない何かがあるというのか。

神の領域への扉を押し開くと、
そこでは燃え立つような色彩に囲まれて、
神々が踊り狂っていた。
音たちが氾濫し、形象が舞い、
無数の菩薩たちの思索の渦が全存在者を包み込み、
宇宙の中心では神が偉大な交合を遂げていた。

沸騰する思念をもっと沸き立たせるがいい。
ぼくを捉えている時間を極限まで煮込むがいい。
真理はどこにもない。
巨大な空無の中を闊歩する神々と
踊り狂うひとりぼっちのぼく。

そのとき老いさらばえたひとりの老人が
ぼくの肩をたたいた。
そして首を振り、遠くを指さした。
小さな記号がひっそりと
墓標の上に置き去りにされていた。

1996.12.1

ペルシャの呪術師たちに

呪術的な音階に乗り
仮面を被って夜の舞台上で踊る
なにものでもない者たち、
求道者たちの曖昧な祭儀の声をぬって、
未知なるものへと突き進む
ぼくのではない一つの夢、
神の領域がぼっかりと口を開け、
幻影からの踏破を目指して
賢者たちが孤高の乱舞を繰り返している。

通過の原理、
永遠がせりあがってくる無音の領域、
新たな錯乱と閉ざされた幻惑。
孤独な行者のように、
亡霊を追い求める亡者のように、
しわがれた声で永遠から剥ぎ取った音を
朗唱するぼくではないぼく。
凶兆を顔に塗りたくり、
異質な光明に包まれた宇宙的形象に
泥水をふりかける誰でもない者たち。

頭に灰を撒き、
夢を食い散らす虫たちを
神とともに曼陀羅の中に書き加えよう。
ペルシャのオルガンが鳴っている。
時間を沸騰させる宇宙の背後で、
独りぼっちな呪術師が
ぼくと向かい合っている。

(T. Riley “Persian Surgery Dervishes“に)

1994.8.15

神界へ踏み込み

神界へ踏み込み、
聖仙リンたちの声に包まれて、
存在の深奥に潜む
真理の断崖へと歩み寄った。

その道の途上で、
涯しないもの
途方もないものに向かって胸を開く
誰でもない者たち。

乳海では、無数の想念が
独特の韻律で泡立ち、
天界では、アプサラスたちが
時空を切り裂いて飛来している。
大地では、埃っぽい風に交じって
無気味な燔祭の煙が立ち昇り、
戦士たちの鋭い眼差しが
虚空を過ぎる鳥たちの群れに
引き付けられている。

そして、ぼくは
誰か名も知らぬ者たちが砕いた道を
再び歩く。
天空を彩る星々の響きにも似て、
けれど、四三億二千万年のかなたから
けれど、無限をざわめく宇宙の涯てから
呼び掛けてくる者たちの声に
ぼくは耳を傾ける。

朗誦する賢者たちの声に包まれて、
敬虔で奢ることのない
導師たちの音楽に導かれて、
舞い降りてくる何者か。
曼陀羅の世界に降り立ち、
恐ろしい形相の奮怒神や
超越者の闊歩する宇宙で
交合を遂げる神々の間をすり抜ける
ぼくではないぼく。

誰も知らない道が
どこかへ漕ぎつなく続き、
未知なるものが
途方もない時間の発散に向かって
吹き荒れている世界。
そしてその天の底で、
調和と碎破と
空無へのとどまることのないゴーゴーという
存在の濁流が渦を巻いている世界。

決して永遠なるものに
結び付けられているわけではない。
そこへ至る道が
必ず存在するというわけでもない。
ブッダの教説ですら
世界を完全に突破しきったわけではない。
漠々たる時間と空間が
ただある！
あるいはない！
ジャッカルの無気味な遠吠えが聞こえ、

超人間的な領域への様々な風が
音もなく吹きすさんでいる。

静謐の音を響かせて
玉砂利を踏む菩薩たちの列。
広大な大地を覆い尽くすかすかな残光。
そして夜の大気を貫く
不思議に張りつめた一条の気。
あたかもユガの終わりを暗示するかのような
生ぬるい風が沸き起こり、
けれど僧たちはヴェーダを誦し、
燔祭の煙をただ上げ続ける。

ゼロと一、それから無限。
今日を噛み込む神の手が
いつか永遠を刻む韻律へと変わる日、
一切の喜悦を超越した神々が
生成と破壊の交錯するはざままで
永劫の虚無を踊り巡る日、
その喜悦に満ちた踊りに流れ込む
打ち壊された瓦礫の数々。

1994.5.25

今日の夢を今日のために紡ぎ

かつてぼくは夢を刈り取る原野で
激しい閃光にさらされながら
どこにもいない神に祈りを捧げた。
求道者たちの残した祭壇の前で
夜空に舞う金色の鳥たちの飛翔を
マーダナの高貴な光とともに見つめた。

けれど夢を紡ぐ音たちの列は
今なお無明の大海の中をさまよいつづけている。
求道者たちの声はか細くなり、
敬虔な勤行の響きは不毛の大地の上で干からびている。

今日の夢を今日のために紡ぎ、
明日の夢を明日のために紡ぐ。
あてどもない夢が砂の上に砕け続ける時間、
それがあなたの荒野であった。

2003.3.22